

## マリンチェ

伊藤 滋子

1521 年、アステカ王国は陥落し、コルテスの率いるスペイン軍がメキシコを征服した。かれより前にもキューバから二つの探検隊が出たが、いずれも先住民に上陸を阻まれ、大した成果を得られないまま帰還している。コルテスは先の探検隊が持ち帰った精巧な細工の金製品を見て、どうやらそこには発達した文明を持つ民族がいるらしいという予感を唯一の拠り所に、すべてを賭けて未知の地を目指したのである。もちろん、その成功はアステカ王国自体が内部に抱えていた問題に起因するが、隊員五百人に馬や大砲を備えた周到な準備と、コルテスの卓越した統率力に負うところが大きい。その上、かれは先住民と意思疎通ができるという、前の隊にはなかった幸運に恵まれた。

先ずはユカタン半島に上陸した時、マヤ語を自由に喋れるスペイン人アギラールを救出したことである。先住民に捕らえられ、8 年間もその中で暮らしてきたかれは、こののち通訳として大いに活躍する。次のタバスコでは上陸を阻まれて激しい戦闘となったが、新大陸にはいない馬を初めて目にした先住民が恐怖のあまり総崩れとなり、これを打ち破ることができた。そして恭順のしるしとしてコルテスに差し出されたさまざまな品の中に 20 人の年若い女奴隷がいた。コルテスは彼女たちに洗礼を受けさせたあと、部下に分け与えた。この時真っ先に選ばれ、隊の唯一の貴族であるプエルトカレロ

に授けられた、際立って美しい娘がマリンチェであった。コルテスは最後に残ったいちばん醜い娘を取ったという。

当初からの目的地であった現在のベラクルスの辺りまで来ると、アギラールのマヤ語はもう通じない。そこで登場するのがマリンチェである。彼女はマヤ語のほかこの地の言葉であるナワ語を話せたことから、コルテスはアギラール、マリンチェと二重の通訳を介して土地の者やアステカ王国の使者との意思疎通が可能となった。プエルトカレロがコルテスの立場を弁明するためにスペイン本国に派遣されたあと、コルテスは残されたマリンチェを自分のものとし、以来彼女は影のようにコルテスに付き従った。先住民がコルテスと話す時は常に彼女が一緒なので、ついには彼らがコルテスに向かって「マリンチェ」と呼びかけるようになるほどであった。

なぜ彼女は二つのことばを話せたのだろうか。それは彼女の不幸な生い立ちに由来する。マリンチェはアステカ王国の圏内にある村の首長の娘として生まれ、何不自由ない幼少時を送り、それ相応の教育を受けていた。ところが父が死んで、その後再婚した母親のがちに生まれた弟を首長の座につけたいと望んだ。そこで血筋の上では正統であるマリンチェが邪魔になり、彼女を旅の商人に売り渡してしまった。そして人から人へと売られてタバスコまで連

れて来られ、奴隷として少女時代を過ごしてきた。しかしこれは最も一般的に信じられているストーリーで、彼女の出自についてはほかにも様々な説がある。名前も、洗礼の時に授けられたマリナという名前をナワ風にしてマリンチェと呼ばれるようになったが、元の名はマリナル、マリナリ、あるいはテネパルなどの諸説があり、はっきりしない。ただ確かなことは、このマリンチェがコルテスのメキシコ征服に決定的な役割を果たしたということである。

彼女は非常に聡明な女性で、スペイン語の上手さも早かった。その通訳ぶりは単に言葉を置き換えるだけでなく、話の中身を補足したり、時にはもっと踏み込んで、自分の言葉で語りかけたり、ある時はコルテスに助言することもあった。たとえ王侯貴族を相手にするときでも物怖じせず、堂々とわたりあう。スペイン人を全滅させる計画があった時も、それを察知した彼女の機転のお陰で、相手の機先を制することができた。また、敵の真只中で多くのスペイン兵士が傷つき、いつ全滅させられるかと怖気づいて震えている時も、彼女は微塵も恐怖の色を見せず、平然としており、スペイン兵を驚嘆させた。ベルナル・ディアスはコルテスの隊の一兵士として征服に加わり、何十年のちに綴った詳細な回想録のなかでこのようなことを伝えている。皮肉屋のかれであるがマリンチェに対してだけは別で、スペインでも身分のある女性にしか使わない敬称『ドニャ』をつけ、敬愛の情をこめて多くのページを彼女に割いている。過酷な生い立ちにもめげず、人を惹きつける魅力を持つこの女性に対するベルナルの暖かい眼差しには、人種偏見のかけらもない。饒舌なベルナルに反して、コルテス自身はマリンチェのことを単に『通訳』としか記していない。それがスペイン王への報告書のなかであってみれば

仕方のないこととしても、やはりコルテスにとっては彼女も関係のあった数知れない女のひとりに過ぎなかったようだ。だが、子供に対しては少し違った。

征服が終わった翌年、マリンチェはコルテスの子供を産む。メキシコ最初のメスティソ（混血児）の誕生である。かれにとって最初の男児とあってコルテスも大いに喜び、マルティンという自分の父親の名前をつけた。コルテスはマリンチェの子供をまだ幼いときに母親から取り上げ、スペインの親戚に送って養育した。当時ヨーロッパでは庶子にも遺産相続の権利があったが、メキシコでは遺産ばかりか、役職や社会的名誉からも除外されていた。コルテスは庶子のマルティンに嫡子と同等の権利を持たせるべく、ローマ教皇に特別許可を願いでて、これを許されている。マリンチェの出産の直前、コルテスの正妻がキューバからメキシコに着いた。その妻が、到着後三ヶ月を経ずして突然死んだ。コルテスのはちにスペインで貴族の娘と再婚するが、有利な結婚のために最初の妻を殺したという噂は生涯かれにつきまとう。マルティンの十年後に生まれた正妻の長男にもやはりマルティンという名前をつけ、庶子のマルティンから後継者の地位を取り上げてしまった。庶子の方は弟の補佐役として生涯を送り、悲劇的な最後を遂げるが、早世したマリンチェは息子の不幸な行く末を知らずにすんだ。

1524 年コルテスは反乱を起こした部下の懲罰のためにイブエラ（現ホンジュラス）へ遠征、マリンチェも 2 才になったばかりの子供を残して付き従う。行軍の途中、コルテスに行く先々で首長たちに挨拶にくるように命じ、この時マリンチェは図らずも自分を捨てた母親と弟に再会した。二人はどんな報復を受けるかと恐る恐る現れたが、マリンチェは涙を流す二人

をやさしい言葉で慰め、宝石や衣服などを贈ったという。しかしコルテスにとって、この一年半に及ぶ遠征は何の益もなかった上に、実に苦々しいでき事ばかりで、殆ど失策といえる出兵であった。

まず、人質として同道したアステカ最後の王クアウテモクを拷問にかけた末、殺してしまい、歴史に汚名を残すこととなる。熱帯の密林の中の行軍は困難を極め、熱病にかかったコルテスは一時は死を覚悟した。そしてかれの留守中、メキシコの政治は大混乱に陥る。またマリンチェの身にも大きな変化が起きた。まだ旅が始まって間もない頃、コルテスは突然彼女を部下のハラミリョと結婚させてしまう。相当な持参金を付けての上ではあったが・・・新郎は結婚式の夜、酔いつぶれてしまったという。ホンジュラスからメキシコへ帰る船の中で、彼女はハラミリョの娘を出産した。そしてその翌年、マリンチェは死ぬ。「私の息子よ」と泣き叫びながら市中をさまよう彼女の亡霊が見られたと言われている。

それから三世紀後、スペインから独立したメキシコはそのアイデンティティを非スペイン

的なもの、先住民的なものに求め、指導者層は白人であるにもかかわらず、アステカの後継者を自認した。そして新しい歴史が書き換えられていく過程で、アステカ最後の王クアウテモクは英雄となり、マリンチェはスペイン人の手先として槍玉に挙げられる。彼女を敵視するイメージは徐々に膨らんでゆき、ついには「裏切り者」の代名詞にまでされてしまう。しかしマリンチェは一体誰を裏切ったというのだろうか。裏切るためには自分自身がその集団に属していることが前提であるはずだが、彼女は自分が生きている社会から疎外され迫害される奴隷だった。また、アステカに敵対していた様々な部族がコルテスの側について戦ったが、かれらが裏切り者呼ばわりされるのは聞かない。まるで神殿に捧げられる生贄の羊のように、すべての悪をおしつけられ、メキシコの負の部分の象徴とされてしまった可哀想なマリンチェ……。一体彼女にどのような選択肢があったというのだろうか。彼女はただ、精一杯生きてただけなのに。

(いとう・しげこ)